

# マラヤ新石器時代グアムサン遺跡他の土器

川名 広文

## 1.はじめに

前稿で検討したグアチャ遺跡およびテクレンブ遺跡以外のマラヤ新石器時代の土器を遺跡ごとに採りあげ、検討を加えてみたい。ただ、文面だけでなく実測図などが添えられてある報告事例を優先することになり、また遺跡に関わる調査知見に精粗が存在することも断わっておかねばならない。

本稿を含む一連の作業により、半島マレーシアにおける新石器時代土器群の概要を把握することができると思われる。さらに、続く初期金属器時代の土器を研究する際にも、技法や組成、系統の面から揺るがぬ基礎を提供してくれるだろう。

## 2.事例検討

各遺跡の土器の様相をおさえ、その後にとまとめた好例として先に拙稿 [川名 2006 a・b] で採りあげたグアチャ遺跡 (GC:略記) やテクレンブ遺跡 (TL) での器種・類型と対比しながら検討していきたい。

### <グアムサン遺跡>

グアムサン (Gua Musang) 遺跡は、半島マレーシア (旧称マラヤ) の北東部を占めるケラントアン州に所在し (図1)、州都コタバルで南シナ海に注ぎこむケラントアン川の支流の一つであるガラス川の中流域東岸に位置する。詳しくはケチル川との合流地点近く、鉄道のグアムサン駅を見下ろす石灰岩丘陵の北西面に向いた洞窟に占地している。

1939年シンガポールのラッフルズ博物館に所属した学芸員ツイディーの踏査により発見された数基の洞窟遺跡群である [Tweedie 1940: 10-16]。

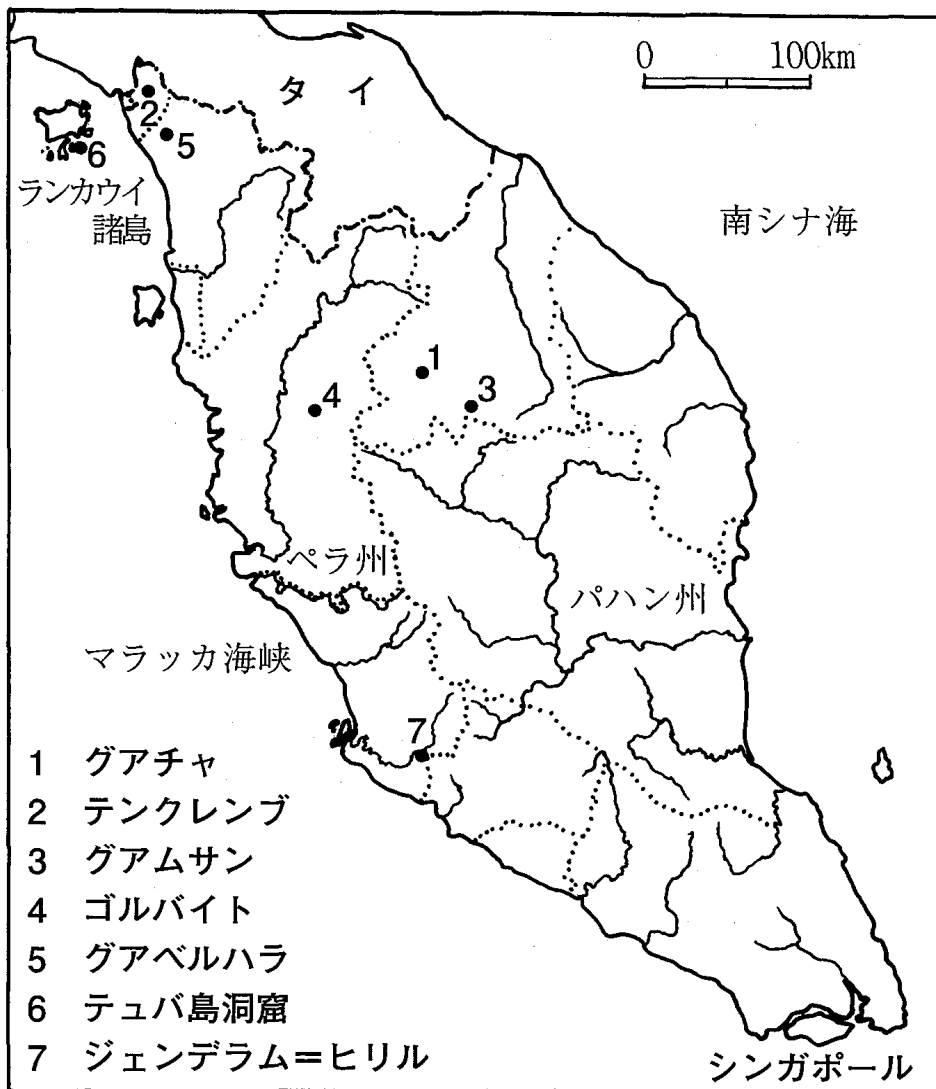


図1 半島マレーシアの参照遺跡位置図

まず南西面に開口した一つの大きな洞窟（第1洞窟と仮称）においては、地元農民の肥料採掘による攪乱を被っていたものの、多数の土器片並びに磨製石器3点が採取されたほか、乱されていない入口近くの包含層の小発掘が行なわれた。土器片はおもに地表面下10～15cmの灰や炭化物を含む薄い層から出土しており、これより下位では急に稀となり30～40cmの層では皆無になった。

次いでずっと小規模な別の洞窟（第2洞窟）へ移り、攪乱を被っていない包含層にトレンチを入れ、多数の土器片等の出土をみた。深さ15cmごとの層序で発掘され、出土土器や9点を数える伴出した新石器時代の

磨製石器等の大半は、その最上層に集中してみられた。加えて、海産貝であるタイワンハマグリも1点出土。そこには同様に薄い灰層も挟まっていた。第2層になると出土量は先の20%に減じ、第3層ではほとんど認められなくなる。結果、この洞窟からは都合2千点を超える容器片が見つかった。

いずれも層位的にはおそらく、同時期もしくは近接した時期の一括遺物とみてよいであろう。大半は第2洞窟から得られ、完形品こそないが、接合により器形復元の可能な土器がいくつか存在した。

当該報文とは別に、後年B.ピーコックが図化・類別して紹介しているので [Peacock 1959 : 135-36]、以下に補筆し列挙する。なお、GMはグアムサン遺跡の略記として用いる。

GM 1種 大型バケツ形容器 (図2 : a, b)

赤褐色。粗い縄目を施す。

GM 2種 三段突帯の鉢 (図2 : c)

暗褐色。無文で磨きを施す。

GM 3種 器台 (図2 : d)・高坏 (e)

d : 無文でスリップ、赤塗りを施す。

e : 暗褐色。脚部は平滑で、坏部の下外面に縄目を施す。

GM 4種 稜付浅鉢 (図2 : f)

暗褐色。体部に縄目を、口縁部に磨きを施す。

順に言及すれば、GM 1種 aはGC 7種 eに、GM 1種 bはGC 6種 aにそれぞれ相当するが、比して一回り大振りとなる。GM 2種 (三段突帯の鉢) は両遺跡に類品をみない新たな類型であり、二段突帯を有すGC 2種 bや同 g・hなどの複合組列下にあるものとみられる。GM 3種 d (器台) はGC 9種 eやTL 7種に類似するが、皿部を広く採り脚部は裾が広がらず真っ直ぐ長く伸びる形状になっている。GM 3種 e (高坏) はGC 1種 1類に近似するものの赤塗りを施さず、器形をとっても両遺跡にない新たな類型とみることが出来る。最後のGM 4種はGC 2種 d・eに相当する。

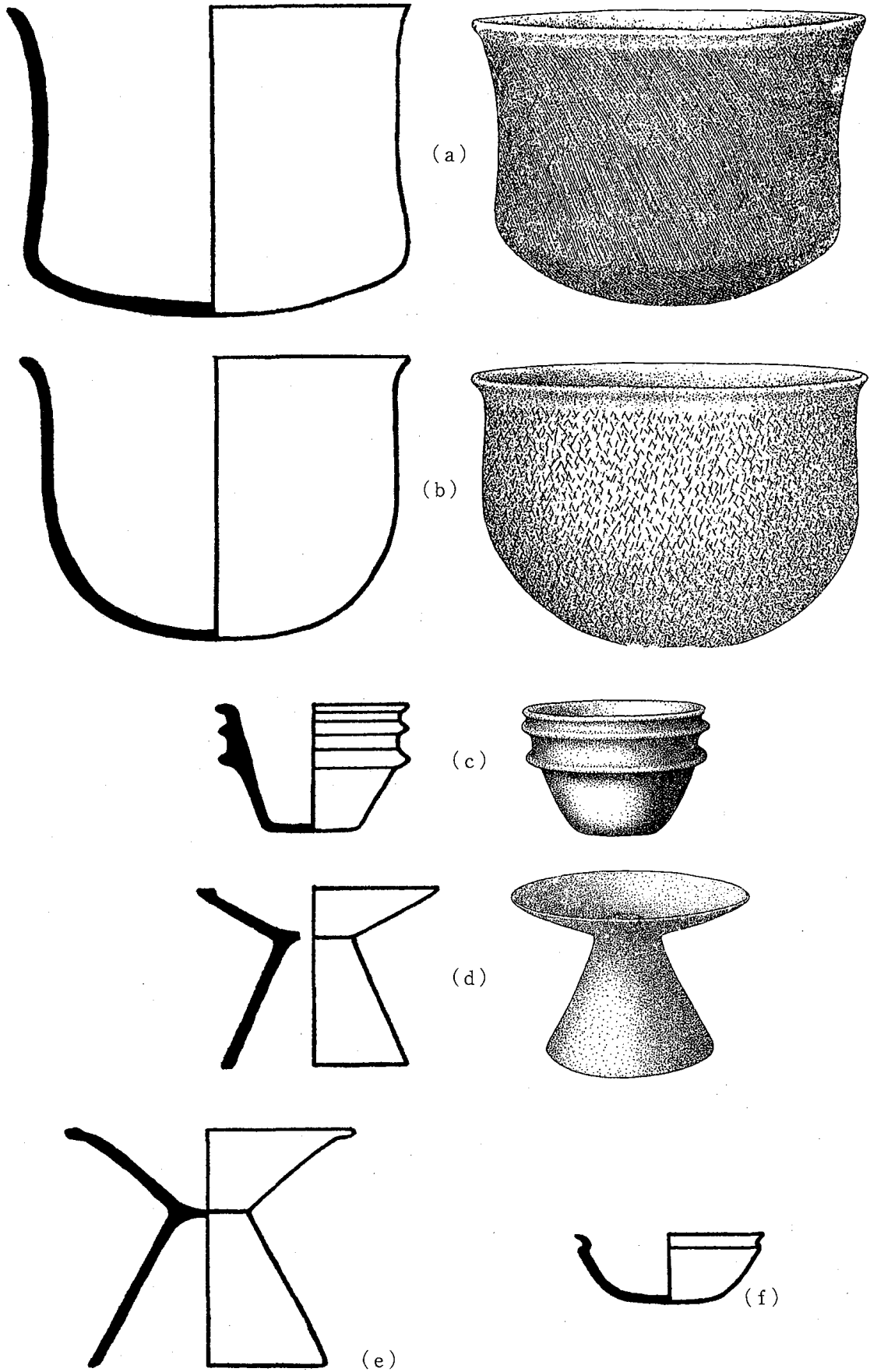


図2 グアムサン遺跡出土土器-1/8

### <グアバマ遺跡>

パハン州に位置するグアバマ (Gua Bama) 遺跡から出土した碗が報告されている [Tweedie 1953 : 50]。復原図 (図3) に依れば、稜を介した口縁部を除く身部と底部に縄目を施してある。概ねGC5種1 (標品: グアチャ遺跡7号墓No.2) に相当するが、幾分大振りとなっている。

### <レンゴン地区の遺跡>

ペラ州北部のレンゴン地区の数遺跡から出土し、おもに1950年にウィリアムズ・ハントが収集した先史土器の標品 (図4) が紹介されている [Peacock 1959 : 136-37]。

a は1917年にI.H.N.Evansが発掘したグアカジャン (Gua Kajang) 遺跡の表土下30cm内の層位から出土した資料で、後年H.D.コリングズによって第3回極東先史学会議において報告された [Collings 1940 : 128]。台付浅鉢で無文にしてスリップ、赤塗りが施されよく磨かれているが、釉薬は認められない。胎土はきめ細かい砂素地に金雲母が混和されている。通常の“洞窟文化”の土器とはおよそ似つかないようである。器種としてはグアチャ遺跡にすでに出現しているものの (GC1種)、本例は変移を経て初期金属器時代に降る所産とみられる<sup>\*1</sup>。

b はグアゲロ (Gua Gelok) 遺跡出土の碗で、明赤褐色を呈し、外面に縄目を施す。GC5種に相当する。

c は稜をもつ鉢で、暗褐色から黒色を呈し、口縁部に磨きを、基底部に縄目を施す。GC3種やTL⑤型 (5種) に相当するが、口径が大きくなる一方、器が浅くなっている。

d はグア=バツーツカン (Gua Batu Tukang) 遺跡出土の突起付浅鉢で、暗褐色を呈し口縁部に磨き、身部に縄目を施す。GC2種に相当する。

e は坏で明赤褐色を呈し、口縁部を平滑にし、身部に縄目を施す。GC5種の一部に近似する。

f はグアバダク (Gua Badak) 遺跡出土の浅鉢で、明赤褐色を呈し、器面は粗く滑らかである。GC5種 i に相当する。

### <ゴルバイト遺跡>

ペラ州スンガイ・シプト (Sungai Siput) の町北西、詳しくはBatuTujoh村

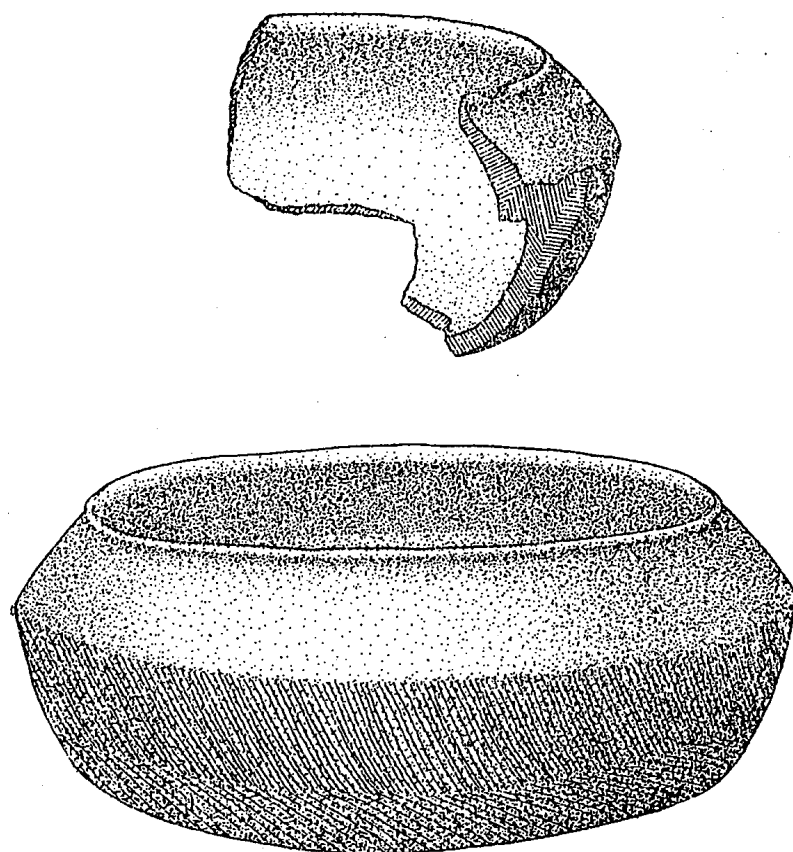


図3 グアバマ遺跡出土土器-1/4

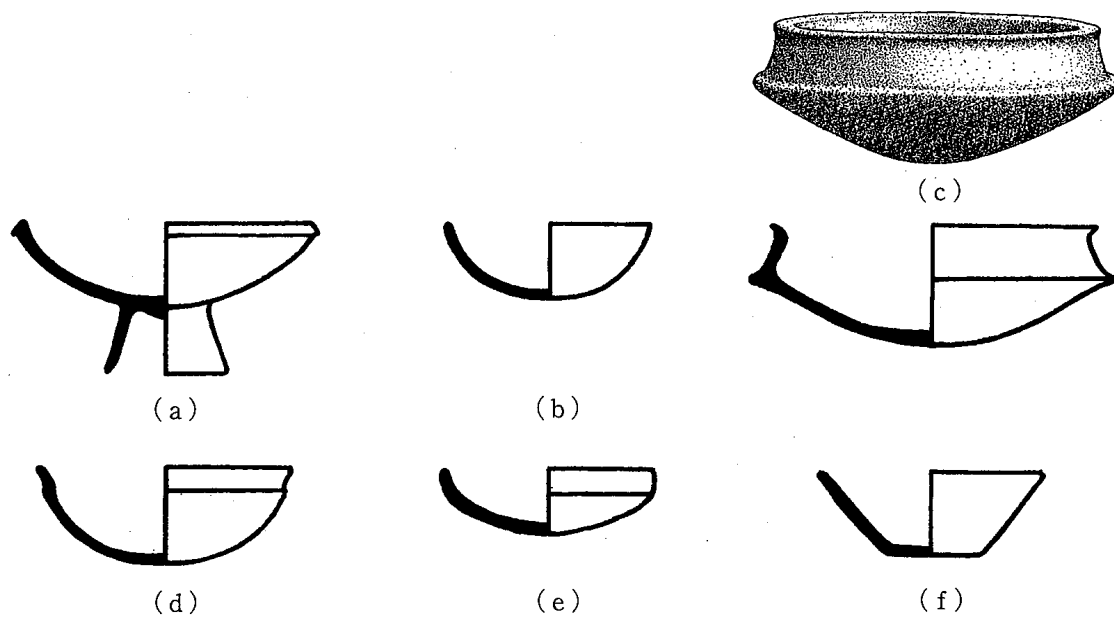


図4 ペラ州レンゴン地区諸遺跡出土土器-1/8

の東側に延びる石灰岩壁北西地点に位置する岩陰に存在したゴルバイト (Gol Ba'it) 遺跡は、1936年にP.V.SカーレンフェルスとH.D.ヌーンによって発掘された[Callenfels & Noone 1940]。遺物包含層は深さ3.5mに達し、中石器時代ホアビニアン(Hua Binian)の居住層の上に新石器時代や鉄器時代の文化層が乗っている。関係する上層には新石器時代の伸展葬が数体認められている。

別稿 [Collings 1940] で出土土器の標品が図を交え報告されており、なかに新石器時代に属するとみられる例がある (図5)。1は灰色を呈する浅鉢で粗い砂を混和しており、表面に縄目を不規則に施す。GC5種に相当しよう。2は非常に粗雑な暗灰色を呈する容器の口縁部で、不明瞭な縄目を斜行させている。GC5種に近似するが、その変種とみられる。3はきめ細かい灰色の稜付浅鉢で、細かい砂を混和する。内面は磨かれ、外面に縄目を施す。GC2種に相当する。4は灰色を呈する碗でかなり細かい砂を混和しており、口縁部を除いて密で細かい縄目を施す。縄目押捺の後に外反する口唇部を貼り付けている工程が観察されている。GC5種1に近似する。5はきめ細かい灰色の容器で、ろくろ成形にしては形状が不均整なので、器面にみられる線痕からみて回転台の上で製作されたらしい。不規則な磨きの帯が唯一の加飾である。バケツ形容器GC7種gに相当しよう。

他に中国の鬲に類似した脚部についての記述があるので [Callenfels & Noone 1940:123]、赤色を呈する三足土器を伴っていた事が認められる。

#### ＜グア＝ベルハラ遺跡＞

ケダ州北端の町コディアン (Kodiang) 近郊に位置するKaplu山の北西面に開口し眺望のすぐれた大きな岩陰に営まれたグアベルハラ (Gua Berhala) 遺跡から出土した資料がある。最初は1929年にグア＝トパン (Gua To Pan) 遺跡の名称にあって、I.H.N.エヴァンズが縄目文土器や骨角製品などを発見した [Evans 1931]。また戦後に至り1951年にウィリアムズ・ハントが再訪し、新石器時代の石斧3点や多数の土器片を採集し要所を記述している [Williams-Hunt 1952:182]。

赤色スリッパをかけ磨かれた稜付浅鉢 (GC2種に相当) がみられ、その

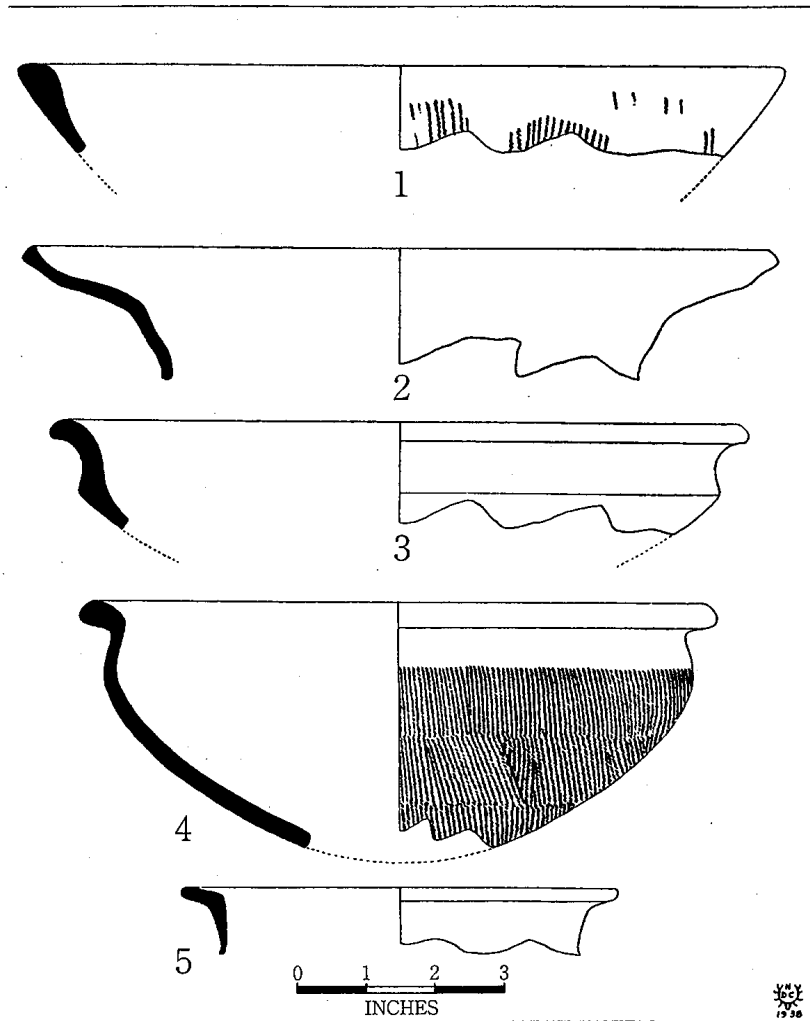


図5 ゴルバイト遺跡出土土器-1/4

なかには器内外面に縄目が施された二層器壁の特異な例も含んでいる。

また、焼成が良好で円錐形を呈し背丈35cmほどになる土器片が約30点認められ、これらは細かな縄目で装飾され二、三の透かし孔をも具えている。そうした脚部は角張った形状のものもあれば、比較的粗仕上げで済ましている例もみられる。正確な用途は不確かとしながらも、多分仏教に付随する儀礼的な趣旨を有していた面が示唆されるとした。

後年B.ピーコック [Peacock 1959 : 140] は、こうした三足土器を伴出した稜付浅鉢と同時期に属するものと仮定しておそらく大過ないだろうとし、さらにその標準形を復原した (図6 a)。口径29cm、器高28cm前後を測る。ちなみに後述の集成研究 [Leon 1990 : 68] に依れば、口縁



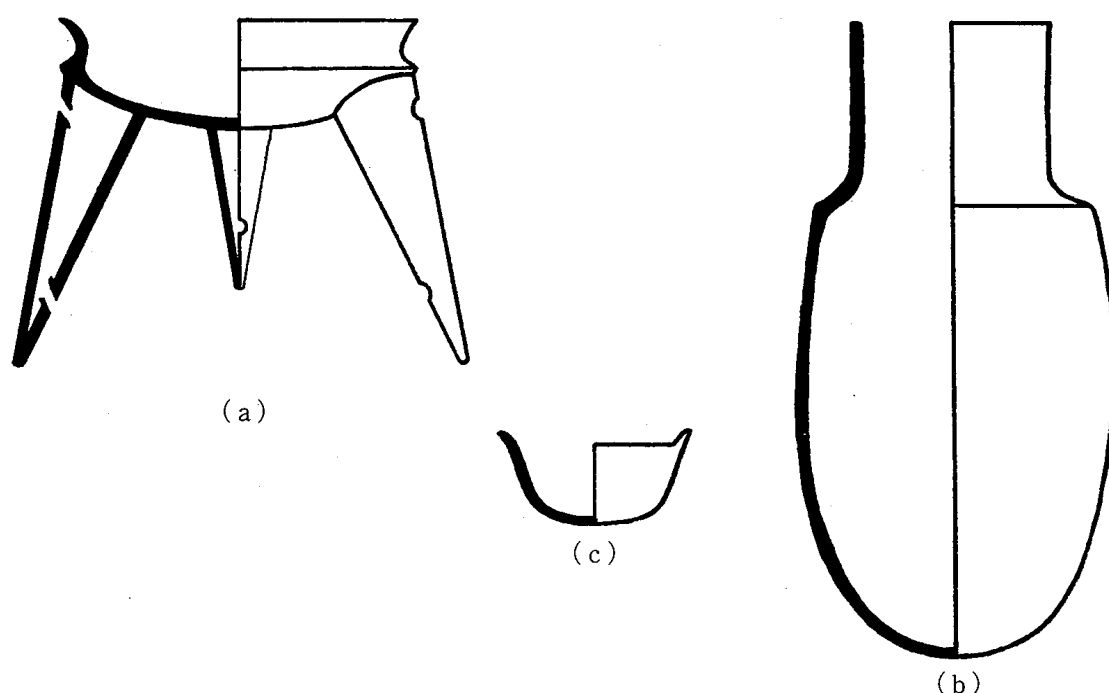


図6 グアベルハラ遺跡、テュバ島洞窟遺跡、ワンピサン遺跡出土土器-1/8

部無文帯を除く基底部および脚部に縄目が施されている。また脚の付け根および対する鉢の基底部には溝が切られており、接着の封泥を塗る際の工夫と言える。ところで、脚部に穿たれた透かし孔は、一見不可解で場違いに見える。しかしながら、同様の円孔は南米の三足土器にも知られる。それらは本来焼成の際に、中空の内部から空気を逃がすために設けられたのかもしれない。この点について、中国の三足土器＝鬲の脚部の中空は鉢につながっており、マラヤや南米の例のように封じられていない、という事実には注意を促すのは重要である。したがって、中国の三足土器では中空の脚部に通気孔を設ける必要がない。

類例としては20世紀前半にさかのぼる知見だが、南タイのSurat村Ta Kanawn地区ブアンベプ (Buang Bep) 近傍の洞窟、パハン州テンベリング (Tembeling) 河岸遺跡、ペラ州ゴルバイト (Gol Ba'it) 遺跡などにみられる [Peacock 1959 : 140-41]。

#### <テュバ島洞窟遺跡>

マラヤ西北部のマラッカ海峡に浮かぶランカウイ諸島に属する小島テュバ島の小さな洞窟から、1924年一つの大きな独特の容器が発見され

I.H.N.Evansが報告した。洞窟内の幅6～9mほどの部屋に達するには、低く狭い入口を腹ばいで通り抜ける必要があった。その壺は洞窟の床面上で別の破片と一緒に見つかったらしい。器高は50cm余に及び、底からその肩部まで全面が不規則な縄目の叩き押捺で装飾されている（図6b）。法量の割に器壁が薄く、胎土は非常に粗く小石が混和されてある。色調は一様に淡黄褐色を呈する [Peacock 1959 : 141]。

マラヤの既知の遺跡には類例が知られず、特異な新種である。丸底で安定性が乏しいが、果汁などの特別な液体を入れ吊下げた容器であろうか。縄目の叩きが施されているので新石器時代の所産と思われるが、共伴資料の検討が望まれる。

#### <ワンピサン遺跡>

ペルリス州の石灰岩丘陵にある岩陰の一つ、ブキット＝ワンピサン (Bukit Wang Pisang) 遺跡で州政府の地質学者C.R.Jonesが縄目の叩き押捺で施文された半球状の小振り碗形土器を発見した（図6c）。器形はごく単純でよく見られるものだが、口縁上に突起が造作されている点の特異である。そうした突起はおそらく3か所に配置された模様である。色調は褐色を帯びた赤色を呈する [Peacock 1959 : 141]。

突起を除く器形本体はGC5種fに近似するが、その変種とみられよう。

#### <ジェンデラム＝ヒリル遺跡>

当初はデンキル (Dengkil) 遺跡と呼称。セランゴール州の東南部、上Langat地区デンキルの東方7kmほど、ランガト川とジェンデラム＝ヒリル (Jenderam Hilir) 村の間にある氾濫原にあつて、1977年錫採掘に際して多種の先史遺物が発見され、マラヤ大学の地質学者によって報告された [Batchelor 1978]。なかに新石器時代に属するとされる復原土器がある（図7）。浅鉢で、身なかほどで内に屈曲し口縁部でまた外反する器形をなす。外面は桃色を帯びた灰色を呈し、肩部に細かい縄目を、下半に放射状に粗い縄目を施す。灰色の内面には細い磨き痕が走る。

報告者 [同 : 43] はテックレンブ遺跡TL8種gにあたる折返し口縁を有す丸底の鉢 [Williams-Hunt 1952 : Pl.9-③] に酷似するとみるが、

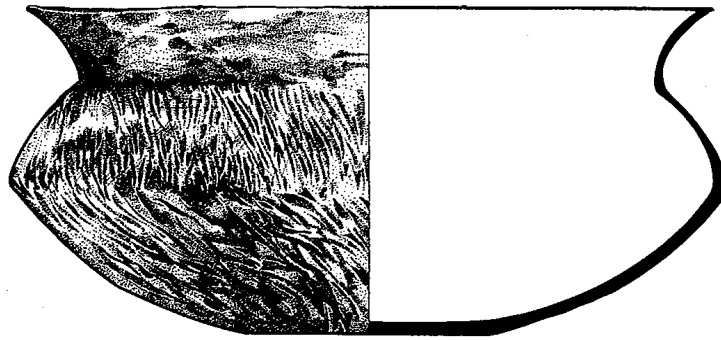


図7 ジェンデラム=ヒリル遺跡出土土器-1/4

本例は一応平底で一回り大振りのうえ、薄手の器壁、屈曲部や口唇部の造作、縄目押捺の手法などで差異が認められるので、むしろ別な類型と捉えた方がよいように思われる。なお、資料豊富なグアチャ遺跡にも類例をみない。

### 3. 考 察

今回採り上げた諸遺跡の出土土器には、まとまった土器組成が得られているグアチャ遺跡やテンクレンブ遺跡と共通する例品のほかに、そこでは見られない器種や類型も若干認められた。説明の繰り返しを避けるが、二、三について特記しておきたい。

グアチャ遺跡に近いグアムサン遺跡のGM2種（図2c）やGM3種e（図2e）は、グアチャ遺跡の典型例からそれぞれ変移した類型とみなされる。近接するパハン州のグアバマ遺跡やペラ州のレンゴン地区諸遺跡から出土した土器は、ゴルバイト遺跡の三足土器を除けば、既知の類型にあてはまるものが多い。他方、やや隔たったセラゴール州のジェンデラム=ヒリル遺跡では、基本的な器形である浅鉢（図7）にあってもグアチャ遺跡の標品とは異なり、そこに地域性を窺うことができる。また、テュバ島出土の縄目押捺文が施された独特な壺（図6b）は、アングマン海に面した南タイ島嶼部に類例を見出せそうであるが、今後の課題としたい。

今後、正規の発掘資料に基づき年代差と地域差の両面で検討し、土器型式が細別設定されていく事が望まれる。なお、メルクマールとされる

縄目施文が新石器時代にとどまらず、初期金属器時代にも一部継承されていた可能性も考慮しておく必要がある。

次いで、その縄目施文に関する一つの学史的事実にふれておこう。フランス極東学院のM.コラニ女史が北ラオスの巨石記念物に関する不朽の業績のなかで、ある種の縄目装飾文は、縄を密に撚って平木に巻きつけ、焼く前の土器をこれで叩いて器面に縄目を押捺することによってつくられる、という仮説を唱えた。そして、オランダ人考古学者A.N.J.Hoop博士が寄せてくれた知見では、彼はジャワ先史土器の繊維装飾の研究を通して、縄目押捺が確かに連綿と繰り返されている実態を発見し、かくしてコラニ博士の仮説の正しい事を証明するものである、とした先行所見 [Callenfels & Noone 1940 : 123] の存在することを改めて想起しておきたい。また、ゴルバイト遺跡における一連の土器群は、おそらくそうした手法がマラヤでも用いられた事を示すだろうと付言している。

最後に、バンカオ土器文化の起源を中国の「原龍山文化」に求める発掘者セーレンセンの説に対し、三足土器は叩き技法という土器作りが必然的に生み出した器形であって、系統的なつながりがあると考えする必要はない [今村 1984 : 263]、との見方もあり、以前から関心と呼んでいる三足土器についてふれておきたい。

P.ベルウッドは、タイのバンカオ遺跡や同じく南タイのブアンベプ洞窟のものとはほとんど同一と言える、通気孔を具えた三足土器がケダー州グアベルハラ洞窟遺跡やペルリス州グアピントン (Gua Bintong) 洞窟遺跡、さらに南方のセランゴール州デンキル (Dengkil) 開地遺跡などにおいて層位的ではないが発見されていることをはじめ指摘した。なお、後者の出土遺物からは2千年前をさかのぼる放射性炭素測定年代が得られている [Bellwood 1985 : 261]。

ここで、インド太平洋先史学会第14回会議 (於 ジョクジャカルタ) に参加した田中和彦による改題 [田中 1991] に準拠しつつ、以下に加筆しながら要所を記述する。上記P.ベルウッドの所見を踏まえた上で、これらの三足土器がマレー半島内の同一地域で作られ他の地域に運ばれたものか、別々の地域で作られたものかは不明であった。マラヤ大学の

S.H.レオンは前稿 [Leon 1990] で、胎土分析によって半島マレーシアの三足土器が少なくとも二つの異なる地域で製作された事を明らかにした。ところで、半島マレーシアの三足土器出土遺跡は、1960年以前に知られていた3か所 (Gua Baik = Gol Ba'it, Gua Berhala, Gua Bintong) に加えて、ペルリス州で2か所 (Bukit Cangkul, Gua Gergasi)、セランゴール州で1か所 (Jenderam Hilir = Dengkil) が発見され合計6か所の遺跡が知られるようになってきている [同: 65]。また、当域の三足土器の脚部にみられる三つの特徴について指摘している。1.円錐形で細長く中空である。2.焼成時に脚の内部の空気を逃がすため、二つの孔が向いあった位置にあけられている。3.外面に縄目文をもつ。特に、中空の脚部が身の底部外面に貼り付けられているが故に焼成段階において脚内部で膨張した空気を逃がすための孔があけられている点は、脚部が中空だが内面で胴部とつながっている中国の鬲と異なる [同: 73]。

さて胎土分析に用いられた試料は、上述のグアベルハラ遺跡、ブキット=カンクル遺跡、ジェンデラム=ヒリル遺跡から出土した三足土器である。蛍光X線分析の結果、諸成分含有率から前二者の土器はその地域内にある石灰岩地帯の粘土で作られ、一方後者の土器は遺跡周辺の沖積粘土を利用して作られた蓋然性が高いことが分かった。なお、ジェンデラム=ヒリル遺跡の有機物数点から、約3000年前～3600年前 (BP) にあたる放射性炭素年代測定値が得られており、タイプサイトであるバンカオ遺跡での同測定値約3700年前と近似する。

かくして“三足土器文化”とでも呼称される新石器時代の独特な農耕集団が半島マレーシアの西海岸地域に存在したことが明らかであるとされる [同: 69, 73]。実際、半島東側に属するグアチャ遺跡やグアムサン遺跡ではこうした三足土器の出土が皆無である実相からも首肯できよう。

#### 4. おわりに

一連の小稿でマラヤ新石器時代の土器について、その器種・類型や施文手法の概要が知れたと思われる。ただ、器種・類型ごとの変遷・推移を明らかにしていく作業が残されている。いずれ良好な発掘資料に接し、

改めて検討する機を得られれば有難い。

註

- \* 1) マラヤ鉄器時代の石棺墓から出土する土器には、組成のなかに台付浅鉢が認められる [川名 2001 : 図5]。なお、同図キャプション中の「鉄器」は「土器」の誤植であり、訂正しておきたい。

参考文献

- 今村啓爾 1984 「東南アジアの土器」『世界陶磁全集』16 (南海) 小学館 254~71頁
- 川名広文 2001 「マラヤ鉄器時代の石棺墓」物質文化70 57~70頁
- 川名広文 2006 a 「マラヤ・グアチャ遺跡新石器時代の土器」比較文化論叢17 (札幌大学文化学部紀要) 1~24頁
- 川名広文 2006 b 「マラヤ新石器時代テンクレンブ遺跡の土器」比較文化論叢18 (札幌大学文化学部紀要) 1~17頁
- 田中和彦 1991 「近年の東南アジアの先史土器研究—第14回IPPA会議に参加して」東南アジア考古学会会報11 115~120頁
- Batchelor, B.C. & Daud Abdul Fattah 1978 Post "Hoabinhian" coastal settlement indicated by finds in stanniferous Langat River alluvium near Dengkil, Selangor, Peninsular Malaysia. *Federation Museums Journal* 22(1977) : 1-55 & plates, Kuala Lumpur.
- Bellwood, P. 1985 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press, Sydney.
- Callenfels & Noone 1940 Report on the excavation in the rock-shelter Gol Ba'it, near Sungai Siput (Perak). *Proceedings of the 3rd Congress of Prehistorians of the Far East* : 119-125, Singapore.
- Collings, H.D. 1940 Notes on the pottery excavated from Gol Ba'it, Sungai Siput, Perak. *Proceedings of the 3rd Congress of Prehistorians of the Far East* : 126-30, Singapore.
- Leon, S.H. 1990 A tripod pottery complex in peninsular Malaysia. *Southeast Asian Archaeology 1986, Proceedings of the first Conference of the Association of Southeast Asian Archaeologists in Western Europe*, edited by Ian & Emily Glover, BAR International Series 561 : 65-76.
- Noone, H.D. 1939 Report on a new Neolithic site in Ulu Kelantan. *Journal of the Federated Malay States Museums* 15(4) : 170-74 & plates, Singapore.
- Peacock, B.A.V. 1959 A short description of Malayan prehistoric pottery. *Asian perspectives* 3(2) : 121-56. (刊行1961)
- Tweedie, M.W.F. 1953 The Stone age in Malaya. *Journal of the Malayan Branch of the*

*Royal Asiatic Society* 26(2) : 1-90 & plates, Singapore.

Tweedie, M.W.F. 1955 *Prehistoric Malaya*. Background to Malaya Series No. 6 (3rd ed. 1965/1970), Eastern Universities Press, Singapore.

Williams-Hunt, P.D.R. 1952 Recent archaeological discoveries in Malaya (1951).  
*Journal of the Federated Malay States Museums* 25(1) : 181-90.

#### 挿図典拠

- 図1 筆者作成
- 図2 Peacock 1959 : Fig. 8、Tweedie 1953 : Fig. 31, 36~38より転載し構成
- 図3 Tweedie 1953 : Fig. 35を転載
- 図4 Peacock 1959 : Fig. 9、Tweedie 1953 : Fig. 34より転載し構成
- 図5 Collings 1940 : Fig. 1を転載
- 図6 Peacock 1959 : Fig. 12を転載
- 図7 Batchelor 1978 : Fig. 8 (a)を転載